

研究所訪問

群馬県医師会・沢渡温泉病院 Sawatari Spa Hospital

所在地：群馬県吾妻郡中之条町大字沢渡2136, Tel 0279-66-2121, Fax 0279-66-2900
ホームページ：<http://www.gunma.med.or.jp/sawatari/sawa.html>

平成13年4月6日、沢渡(さわたり)温泉病院院長菅井芳郎先生(日本温泉科学会評議員)のご好意で病院内を見学させていただき、院長より直接貴重なお話をお伺いすることができたので、その概要を紹介し、温泉病院の諸問題について考える一助としたい。

沢渡温泉病院は群馬県中之条町の上信越高原国立公園内の沢渡温泉にあり、JR吾妻線中之条駅より西北約10km、標高600mの静かな山間にある。周辺には四方(しま)温泉、少し足を伸ばすと川原湯、花敷、湯の平温泉があり、暮坂峠を越えると草津温泉がある(図1)。

JR吾妻線中之条駅から車で15分程走ると、山の中腹に白亜の5階建ての立派な病院が見えてきた(写真1)。病院に到着後、まず、病院で実際出される昼食をいただいた。昼食には天ぷらうどんに山菜の漬物、オムレツが出され、栄養価をよく考えたおいしいメニューであった。

案内のパンフレットによると、沢渡温泉病院は昭和37年7月に(社)群馬県医師会により設立された総合的リハビリテーション病院で、リハビリテーション科、内科、神経内科、整形外科、リウマチ科、歯科があり、病床数は現在201床で、平成9年に設立され運営を委託されている隣接の中之条町老人保健施設「ゆうあい荘」100床と合わせると301床となる。脳血管障害、神経痛・関節リウマチ、外傷・骨折後遺症、脊髄損傷その他の疾患による急性期を過ぎた患者が、医師の紹介により本院の総合的診療を受けた後、セラピストによる運動療法や理学療法(PT)、物理療法、温泉療法、作業療法(OT)、日常生活活動(ADL)訓練、言語療法(ST)、ソーシャルワーク(医療福祉相談、MSW)、医療体育(MST)などの総合的リハビリ

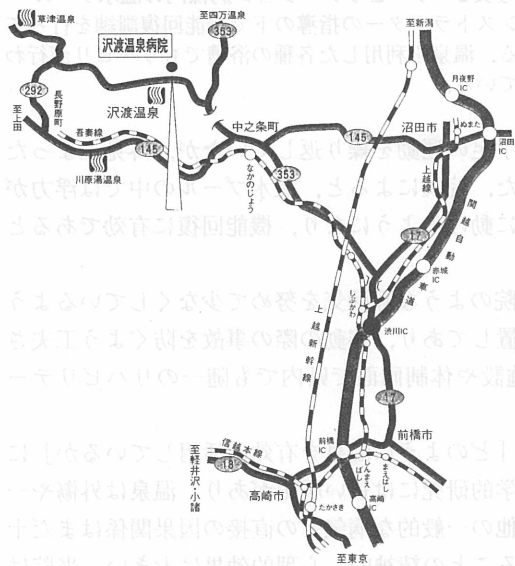


図1 沢渡温泉病院の位置
近くに四万温泉、川原湯温泉、草津温泉がある。

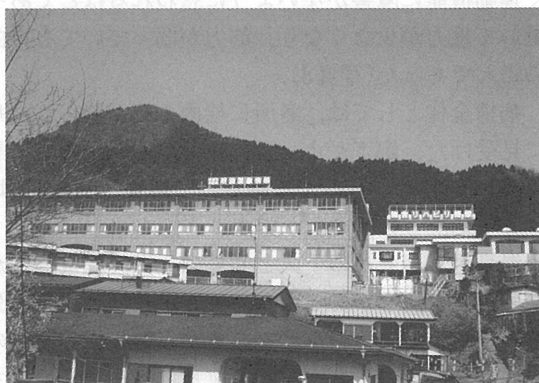


写真1 沢渡温泉病院の全景
温泉街を見下ろす高台にある。

テーションを行い、社会復帰を目指すとしている。

平成12年12月1日からは正式に「一般病棟」, 「回復期リハビリテーション病棟」の2種類の体制になり、まだ医学的治療を必要とする人と、治療後の社会復帰(家庭復帰)を目指す人を病棟として分離して対応するようになった。

午後は院長のご案内で実際にリハビリテーション病棟を見学したが、広々とした明るいホールでは療法士、看護婦(士)などのスタッフの手助けにより理学療法や作業療法などいろいろな療法が行われていた。理学療法では各種訓練機器による訓練、筋力の測定、作業療法では簡単な木工やパソコンを使う訓練などが行える。日常生活活動(訓練)では回復期の患者さんが台所(キッチン)や机などがある部屋で、流しやガスコンロの高さが調節でき、車椅子でも日常生活活動の練習ができるようになっている。言語療法では聴覚の診断や発声訓練ができる。医療体育(療法)では広い体育館で卓球やバレーボールなどが車椅子のままでもできるようになっている(写真2)。

温泉や温水の利用状況については、患者さんが手足の麻痺があっても浴槽に入れるようにリフトなどいろいろな機器が導入されていたり、運動機能が比較的回復期にある人には通常の温泉浴場に近い構造の浴室もあって、症状に応じていろいろ体制が整えられている。温水プールではインストラクターの指導の下に、かなり激しく手足の運動を繰り返していたが、外見上まったく運動機能に障害がないように思われるほどであった。院長によると、温水プールの中では浮力が働いて重力が少なくなり、筋力が弱っていても自由に動けるようになり、機能回復に有効であるとのことであった(写真3)。

病棟全体としては、各所に絵画や花が飾られ、病院のような雰囲気を努めて少なくしているように見えた。廊下やホールには手すりがある所に設置してあり、移動の際の事故を防ぐよう工夫されているのはもちろんである。このように本院は施設や体制両面で県内でも随一のリハビリテーション病院ということができよう。

温泉科学会会員の一人としては、沢渡温泉病院が「どのように温泉を有効に活用しているか」について最も関心があったが、菅井院長は「温泉の医学的研究には長い歴史があり、温泉は外傷や一部の皮膚疾患などに有効であるが、温泉成分とその他の一般的な病気との直接の因果関係はまだ十分明らかでない。しかし、温泉地に滞在して療養することの精神的、心理的效果は大きい。当院は一般病棟の他に回復期リハビリテーション病棟を併設し、リハビリテーションに温泉や温水プールを有効に活用し効果をあげている」とのことであった。



写真2 リハビリテーション病棟内の体育館
車椅子のまま卓球やバスケットボールができるように台やかごの位置が低くなっている。

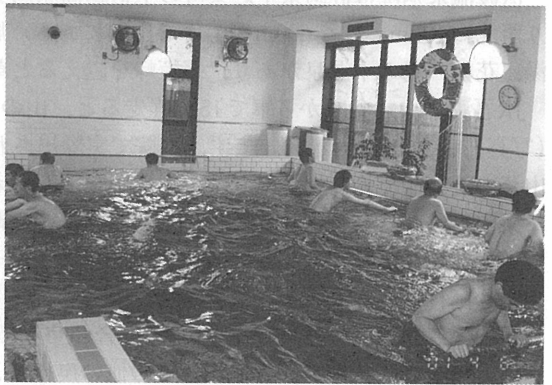


写真3 リハビリテーション病棟内の温水プール
インストラクターの指導の下で機能回復訓練を行っている。温泉を利用した各種の浴槽でもリハビリが行われている。

ここで、沢渡温泉について少し紹介すると、沢渡温泉の発見は古く1191年と言われ、草津温泉から暮坂峠を越えて中之条町に至る街道上にあることから、強酸性で刺激が強い草津温泉の仕上げ湯として古くから知られた温泉である(写真4)。昭和20年4月16日の大火で温泉街は大きな被害を受けたが、その後見事に立ち直り、今日に至っている。当日は特別許可をいただき、源泉の揚湯ポンプ内を見学したが、源泉は14軒の旅館と沢渡温泉病院に厳密に管理され分湯されている。手持ちの温度計と簡易pHメータによると、当日の源泉の泉温は50℃、pH 8.5であった。沢渡温泉病院の温泉分析表(平成12年4月12日作成)では、49.1℃(室温13.0℃)、流出量(動力揚湯)毎分10リットル、無色透明、pH 8.2、泉質はカルシウム・ナトリウム-硫酸塩・塩化物温泉(弱アルカリ低張高温泉)となっている。

宿泊した龍鳴館は源泉のすぐ近くにあり、檜作りの浴槽には24時間温泉が流入している。無色透明であるが、いわゆる湯の花が浮遊していて、やや硫化水素臭があった。浴槽は約42℃、入浴後肌がすべすべして保温効果がいつまでもあった。刺激が少ないので何回も入浴したが、このような1泊2日の短期間の温泉浴は医学的にははっきりした効果は認められないそうである。しかし、リラックスした気分になり、まさに心理的、精神的に十分効果があることが体験できた。

最後に、日本の温泉病院の将来について私なりに感じたことをまとめてみる。現在、残念ながら北海道大学医学部付属病院登別分院など大学付属の分院は相次いで閉鎖されており、群馬大学医学部附属病院草津分院も2002年3月に閉鎖が予定されている。こうした中で私立(民間)の温泉病院はリハビリテーション病院として生き残ることであろう。幸い沢渡温泉病院は平成12年12月より回復期リハビリテーション病棟入院料算定病院(病床数59)として認定され、病院経営面としても順調であるように見受けられた。院長によると、日本は高齢化社会を迎え、長期療養型病院を拡充することと、温泉は治療としてよりも長期療養、リハビリテーションのために活路を見いだすべきであろうとのことであった。

いずれにせよ、今回の訪問で、全国で90ヶ所近くはあるといわれる私立温泉病院の経営には、これまで、また、今後も厳しいものがあることがわかり、改めて菅井院長の16年に渡るご努力に敬服した次第である(写真5)。



写真4 沢渡温泉

手前に沢渡温泉共同浴場があり、地元の人や旅行者でにぎわっている。

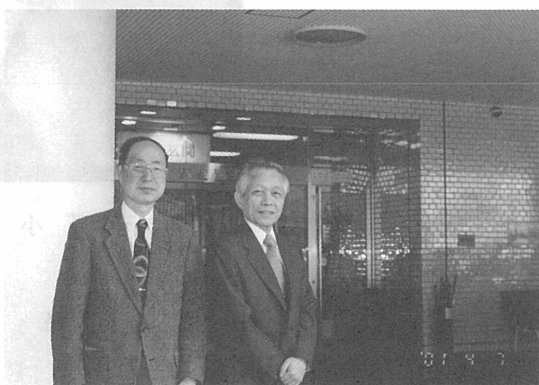


写真5 沢渡温泉病院前にて菅井院長(右)と筆者(左)。

(長島秀行、東京理科大学理学部)